

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「越後のビョーキ自慢ケガ自慢」

元々越後の人は読者も筆者も、しょうがりで奥ゆかしく、嫌と言えないこんじょよしと言われております（多分）。それが証拠に、「頼まれれば米撞きに」、「越後人のひとつ残し」と言う新潟ならではのことわざがあります。おまけに、人より目立つ事を良しとしないので、「先に出る穂はカラスに抜かれる」、「寄り合い欠かすな口きくな」、「本音は酒の席で言え」、という暗黙の掟もあります。だから、ホンネで意見を言う人（筆者）は越後では用心が必要です。

越後人は慎重でストレートな物言いを避け、へりくだるのを美德といたします。昨日フカヒレ食べた話は職場や町内ではひんしゅくもの、シャンパン飲んでもスパークリングワインか発泡酒と言い換えた方が泡、いや、角がたちませぬ。「ホントの事でも自慢に聞こえるから注意しなせや」と越後の人生の達人は忠告いたします。しかし例外がございます。それは病気の話、越後の病気自慢です。この時ばかりは、いかに大変だったか、いかに難儀か、をトクトクと語ってもいっこうに構わないようです。特に体力知力衰えた自分の話ともなれば、周囲の人も負けてはならぬ、とばかりに「やれ、ここがやめる」「あれが大変」「あれが遠い」「そっちは近い」「これが増えた」「ここは減った」「そこも少ない」等々「病気・加齢自慢」に花が咲き、なにやら免疫力アップで痛みも忘れるかのようなありさまで、まさに医院の待合室の様相です。

なお、新潟には、痛みを表す言葉に「やめる」と「いたい」があって、「やめる」は内部のじんじんとした酷い痛み、「いたい」よりも耐えがたい痛みであるように区別しています。ですから「やめるのは治ったるも、まだいたいですて」という言い方をすることがあるので、県外出身の医療従事者は注意

が必要です。

更に、豪雪水害と闘ってきた越後人は辛抱強く、苦痛に耐える力があります。なおかつ自然には逆らえないといったあきらめと潔さを、なかば自虐的に客観視して冷静に語ることも得意です。長岡藩の勇将河井継之介が、左脚を負傷して家臣に戸板で運ばれて峠越えをする際、「八十里 腰ぬけ武士の越す峠」と一句詠んだ話は、彼の不屈の精神と武士魂を伝える話として有名です。「腰（越）ぬけ」は、越の国を後にする彼の無念さと惜別の情をかけてあるという解釈もありますが、激痛の中、故郷を後にするのは文字通り断腸の思いであったに違いありません。

と書きながらも、実は筆者只今右下肢・踵負傷中。やめてやめて、あたたあたたと室内では片足立ちフラミンゴ状態です。というのも、うわー！と思った時には遅かった、注意一秒、熱傷水泡。大騒ぎしても家臣のいない私はとっさに冷やして化粧もコンタクトもせずに信濃川越えて急患センターへ。親切なスタッフと、その後の良き医師・看護師のおかげで、なんとか見かけは元気に「不便さ・思いやり調査」と称してイタタとあちこち出没しております。あっ、ついついケガ自慢してしまいました。反省します。越後のビョーキ自慢ケガ自慢、やはり私も越後人でありました。ということで、皆さまもどうぞお体お気をつけくださいませ。

